

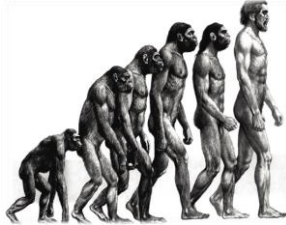


花は生き方を迷わない

永田円了

Your Center

人類は、およそ 450 万年前に二足歩行に進化し、家族をもち集団を築く。その後道具を使うようになり、200 万年前には、心をもつヒトに進化した。



約 175 万年前のドマニシ遺跡から出土した歯のない老人の頭蓋骨がそれを物語る。歯がない状態で生きておれたのは、仲間から介護されたからである。人間に他者を思いやる心が芽生えた証拠でもある。

しかし困ったことが 1 つ起こった。進化の過程で人間にだけに備わった意識（心）が、他の生きものには起こりえない“ぶれ”を引き起こしてしまったのである。



意識と二元性

意識（心）のお陰で、人間はコトバを使うヒトになり、科学が発展し、思考力が備わった。しかし意識はまた、物事を相対的にみる世界を創造した。主観と客観で象徴される二元性のものの見方を人間に強要してしまい、ここに生き方の“ぶれ”が生じる元をつくってしまったのである。

考えてみよう。考え方、行動がぶれるということは、それ以前に本来の軸となるものがあるということ。しかし人間は、24 時間この意識の枠組みのなかで動いているので、その本体・本元が見えなくなっているのである。

それは、例えば専門化された医療体制の中で、ドクターは自分の専門領域の中だけで患者を診察し、人間の全体が見えなくなった状況に似ている。また日々の生活の中、忙しい忙しいで暮らしていると、つい人生の大事な部分が忘れられているようなもの。



人間に意識が誕生する以前の状態、物事を分別する前の状況、無分別の世界（他の生きものはこの世界のみで生きている）がヒトにもあったはずである。

ぶれる世界とぶれない世界、“あなたと私は違う”世界と“あなたと私は 1 つ”の世界、この 2 つの世界が同時に動いている。ではどうすればいいのか。天から人間に与えられたこのよけいな力（意識）を逆に利用して、意識の中で二元性が始まる前の世界を認識することはできないだろうか。

人はなぜ、動物をみると癒されるのか。なぜ野の草花をみて気持ちが清涼にもどるのか。イヌネコには、昨日、今日、明日という概念は存在しない。野の花には意識がない、が故にそこにはよけいな思考に左右されない、生きものの本来の姿を見るのである。

<事例 DVD 等>

人類の進化／心をもつヒトに
鈴木大拙／岡本美穂子／金沢・大拙館にてインタビュー
板橋興宗禅師／はた目を気にして生きている
ダイアナ妃スピーチ／完璧になれない自分
ジェーン・フォンダ／完璧病が支配／Actor's Studio
映画「英国王のスピーチ」吃音を乗り越える
Big Wage／サーフィン／その瞬間は何も考えない
カンガルーの闘い／個と個のぶつかり合い
歌・五木ひろし／花は生き方を迷わない

円了のホームページ：www.enryo.jp



ジェーン・フォンダ